

報道関係各位

日本の寄付文化醸成をめざす

「第16回 まちかどのフィランソロピスト賞」 贈呈先決定

公益社団法人日本フィランソロピー協会（東京都千代田区、浅野史郎会長、高橋陽子理事長）は、「第16回まちかどのフィランソロピスト賞」の贈呈先を下記のとおり決定いたしました。

◆一般部門

《まちかどのフィランソロピスト賞》

ニック・マッセー
Nick Masee 様 (東京都渋谷区)

《特別賞》

たかはしあいこ
高橋 愛子 様 (長野県松本市)

わち ともあき
和知 知明 様 (栃木県上三川町)

◆青少年部門／第4回青少年フィランソロピスト賞

《文部科学大臣賞》

立川市立立川第七中学校 (東京都立川市)

《奨励賞》

さとう ひらり
佐藤 英里 様 (新潟県三条市)

かりよう
山口県立華陵高等学校 (山口県下松市)

青少年部門は、文部科学省の後援を受けて『第4回青少年フィランソロピスト賞』として実施いたしました。

贈呈式は、2013年12月11日（水）午後3時から、学士会館（東京都千代田区神田錦町3-28）にて開催いたします。

「まちかどのフィランソロピスト賞」について…

わが国での寄付文化醸成を図ることを目的として、1998年（平成10年）に創設。社会のために私財を提供した個人またはグループ、学校を毎年顕彰しています。

公益社団法人日本フィランソロピー協会について…

1963年（昭和38年）設立。1991年（平成3年）からは、個人や企業のフィランソロピー（社会貢献）活動の促進を目的に各種事業を実施。2009年（平成21年）公益社団法人として認定。会員数は116社（2013.11.01現在）

<本件に関するお問い合わせ先>

公益社団法人日本フィランソロピー協会

担当：石樽 康利、杉本 美奈子

〒100-0004 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル244区

TEL: 03-5205-7580 FAX: 03-5205-7585 URL: <http://www.philanthropy.or.jp>



贈呈理由

◆一般部門 <<まちかどのフィランソロピスト賞>>

ニック・マッセー (Nick Masee) 様

ニック・マッセーさんは、1962年カナダのトロントに生まれました。国際的な引越し会社をカナダで起業し、1999年に来日以来、会社代表として東京で暮らしています。2002年に明治神宮の花火の見える代々木のマンションに転居したのをきっかけに、自宅に約100名ものゲストを招いて、「花火パーティー」と銘打ったチャリティーパーティーを10年以上にわたって続けている。

パーティーの食事や飲み物などはすべて自費で準備し、慈善福引会用ラッフルのための品物集めにも一人で奔走。当日、ゲストから集めた会費（1人1万円）と、ラッフルチケットの売上金を含め、毎年約130万円以上を全国のYMCAで実施する「障がい児プログラム」に寄付している。

「花火パーティー」を始めた当初は、会費を支払う参加者は2割程度しかいなかったが、近年は参加者全員が会費を払うようになり、また参加せずとも、ラッフルチケットを購入する人も増えてきたことは、寄付マインドの大きな変化と感じている。近隣の住民からの苦情対応にも努力しながら、外国人・日本人を問わず、毎年「花火パーティー」を案内して、その意義や目的を伝える地道な行動は、日本の寄付文化醸成に確実なる貢献を果たしている。この活動を、「まちかどのフィランソロピスト賞」の真髄を体現するものとして称えたい。

◆一般部門 <<特別賞>>

高橋 愛子 様

高橋愛子さんは、1928年に松本市の和菓子店に生まれ、小さい頃から父が卵焼きを作る姿を見て育った。23歳で嫁いだ農家は、自宅の広間で冠婚葬祭を行うことが多く、卵焼きはそのおもてなしに欠かせない料理だった。高橋さんの卵焼きは次第に近所で評判となり、地元の祭りや住民の集まりがある度に、頼まれるようになった。

その後、近所の「道の駅」から商品化を提案され、2010年4月末より、一本300円で販売を始めた。今では人気商品となり、平日は30本程度、土日には50～60本作っている。

当初から卵焼きで儲けるつもりはなく、収益はお世話になった「道の駅」にお茶代として渡す予定だったが、東日本大震災直後に娘さんの勧めで義援金として寄付することを決断。毎年1年分の収益50万円を、東日本大震災や長野県北部地震の支援とし、3年目で計160万円に上る。寄付を始めたころは、「石の上にも3年」と思っていたが、達成した現在は「この歳で健康で働けるのは有難い。丈夫なうちは卵を焼いて寄付したい」と志を新たにして、米寿（88歳）までは続けたいと考えている。自然体で粘り強い活動にエールを送りたい。

◆一般部門 <<特別賞>>

和知 知明 様

和知知明さんは、1964年に川崎市で生まれた。栃木県上三川町でラーメン店「らー麺藤原屋」を経営している。東日本大震災の際には、ラーメン店も被災したが、自分でできることは食べ物の支援だと考え、震災後10日目に「ビッグパレットふくしま」（郡山市）で2,100食のラーメン炊き出しを行った。その年の7月に、被災地支援ボランティア活動を通じて知り合った倉谷昌良さん（Tシャツ制作自営業）から、和知さんの独特な書体のデザインをTシャツにして売って見たらと提案されて誕生したのが通称「和知ちゃりT」である。このTシャツを1枚2,800円で販売し、そのうち和知さんへのデザイン料1,000円を、「児童養護施設」へ寄付することに決めた。2011年11月の販売開始から2年で栃木県内の6か所の施設に、合計約80万円を寄付している。施設訪問の際には、必ず施設の所在する地域の経営者を同行し、現場を見てもらい、理解と協力を求めている。寄付した施設は県内11か所の内6か所とまだ道半ばではあるが、今後の輪の広がり期待を込めて「特別賞」を贈呈したい。

贈呈理由

◆ 青少年部門／青少年フィランソロピスト賞 <<文部科学大臣賞>>

立川市立立川第七中学校

同校は今年で創立 35 年を迎える。2005 年から日本ユニセフ協会への寄付のための募金活動を始めた。その総額が、今年 3 月末で目標の 1,000 万円に達した。学校が荒れていた当時、ボランティア活動が鎮静化のきっかけになるのではという生徒会担当の先生の提案でスタートし、その後は生徒会が中心となり毎年の募金活動の企画・運営を行なっている。

駅前での街頭募金を基本とし、年末や春休みの土日に年 5 回程度実施し、1 回の活動時間は約 4 時間。部活単位で年間 150 名程度（全校 500 名中）の生徒が参加し、東京や上野などのターミナル駅や地元の立川駅などで行っている。年間 100 万円の目標金額を定め、達成できなければ追加で活動を実施する。募金箱の作成、チラシ・ポスター企画・制作や貼り付けなども生徒たちで行い、生徒の感想や飢餓に苦しむ途上国の子どもの様子を掲載して、一人でも多くの人々に募金協力をしてもらおうと、毎年工夫を重ねている。

この募金活動は、不登校や非行に走っていた子どもたちの立ち直りのきっかけにもなっており、自ら考え挑戦し行動する学校風土を醸成している。リーダーシップ教育やシティズンシップ教育の得難い機会ともなっている同活動は、次世代を担う青少年の全人教育のモデルであり、「文部科学大臣賞」として称えたい。

◆ 青少年部門 <<奨励賞>>

佐藤 英里 様

佐藤英里さんは、2001 年新潟県三条市生まれの小学 6 年生。生まれつき全盲のシンガーソングライターで、5 歳の時にピアノに触れて音楽に目覚めた。やがて、老人ホームや災害避難場所での慰問コンサートなど、演奏活動を行うようになった。その後、NPO 法人日本バリアフリー協会が主催する、障がい者の社会進出を目指す「ゴールドコンサート」など、国内外での音楽コンクールにも出場して数々の賞を受賞した。

寄付活動のきっかけは、予定していたコンサートが東日本大震災で中止となり、急きょ地元で小さな「チャリティーコンサート」を行ったこと。「被災地の子どものための支援に」という本人の意向に沿って寄付先を探し、「あしなが育英会」に収益金 6 万数千円を寄付した。

2012 年 7 月、自身で作詞・作曲した初の CD シングル「みらい」を発表し、東日本大震災被災者の子供たちを元気づけようと、「明るい未来に向かって進んでほしい」という願いを込めた。この CD は自主制作でありながら、発売後 3 か月で 1,000 枚も売れ、その売上金 100 万円（1,000 円×1,000 枚）はすべて「あしなが育英会」東日本大震災義捐金に寄付した。これからも活動を続け、売上金が 100 万円に達したところでまた寄付をする考えである。人のために役立ちたいという純粋な思いと行動力に敬意を表し、将来の夢の実現を応援したい。

◆ 青少年部門 <<奨励賞>>

山口県立華陵高等学校

同校は今年で創立 26 年を迎える。文武両道を目指し、野球・ハンドボール・アーチェリー等は全国大会の常連校でもある。創立以来、「国際的に雄飛する、創造性豊かな実践力を持った人間の育成」という教育方針を掲げ、日本赤十字社の青少年赤十字（JRC）に加盟しており、生徒は入学と同時に JRC 委員会の一員となって、地域社会のボランティア活動に参加することになっている。

1999 年に、学校として、NGO「チボリ国際里親の会（JORPA）」に入会し、フィリピン・ミンダナオ島の少数民族チボリ族の子ども一人の里親となり、毎月 2,000 円の教育支援を 14 年間続けてきた。「高校生にとって 2,000 円は大きいけれど、学校全体で取り組めばできるのでは」という生徒からの提案で始まった活動だが、学校単位で里親を務めているのは全国でも同校だけである。月 1 回「チボリの日」と名付けた募金の日には、各教室や職員室での募金から、集計・振込みまですべて生徒自身で行っている。生徒たちの発意を学校が受け止め、その活動を教師が支える、という自主性を重んじながら社会力・人間力を育てていく教育姿勢と、生徒のひたむきな努力に賛辞を送りたい。

「まちかどのフィランソロピスト賞」の概要

公益社団法人日本フィランソロピー協会では、1998年より『まちかどのフィランソロピスト賞』を創設し、私財を社会のために提供した個人を顕彰しております。

寄付活動は、ボランティア活動と並んで、「地域社会のために何かをしたい」という思いの発露として行なわれるもので、米国では個人の寄付活動が盛んに行なわれておりますが、日本では「陰徳」の価値観に支配されやすく、税制も未整備であることから、その実態はよく分かっておりません。

また、寄付の文化を根付かせるためには、少年期、青年期における体験や教育が重要であるとの認識から、2005年度に本賞の中に文部科学省の後援を受けて「青少年部門」を創設し、青少年の取り組みも推進しております。本賞を通じ、各地域で行なわれている寄付の実態を詳らかにし、日本に寄付の文化を醸成する一助とします。

実施要項抜粋

《一般部門》

《青少年部門》

- | | | |
|--------|--|---|
| ● 贈呈対象 | 社会のために私財を投じた個人
またはグループ | 社会のために寄付（募金）・ボランティア
活動をした18歳以下の個人またはグループ
（学校単位も可。高校まで） |
| ● 対象期間 | 2013年1月1日から現在まで | 2013年1月1日から現在まで |
| ● 推薦方法 | 他薦に限る。 | 自薦および他薦
いずれも当協会所定の推薦用紙に記入送付。 |
| ● 選考方法 | 書類審査および訪問面談（ヒアリング）を併用 | |
| ● 選考基準 | ・フィランソロピー精神（人類愛）から生まれた寄付であるもの
・社会のために役立つ寄付であるもの
・寄付にあたって人々を感動させるエピソードがあるもの | |
| ● 表彰 | ・まちかどのフィランソロピスト賞
・特別賞 | ・文部科学大臣賞
・奨励賞
いずれも賞状のみで賞金はありません。 |
| ● 選考委員 | 中島 健三
中村 文代
野田 清信
畠山 礼光
松本 明 | 大阪ガス株式会社
プルデンシャル生命保険株式会社
富士電機株式会社
株式会社リコー
大和ハウス工業株式会社
(五十音順／敬称略) |

フィランソロピーとは…

「フィランソロピー」はギリシャ語の「フィリア（愛）」と「アンソロポス（人類）」を語源とする言葉で「人類愛」「博愛」などと訳されています。日本では「社会貢献」の意味で使われることも多く、寄付、ボランティアを含む民間公益活動に協力する社会的活動をさしています。